能登半島再発見の旅

あの旅から40年…

昭和40年代、若者たちが憧れを抱いて訪れた「能登半島」。
カニ族が目指した秘境は今、どうなっているのか？
ドライブしながらのんびり回る、40年後の能登の旅へ出発。

能登の集落は美しい。黒い瓦屋根に板張りの壁。しっとりと落ち着いた町並みを眺めているうち、「昔の日本には、こんな家々があった……」と遠い記憶が蘇る。昭和の香りがする「金鳥」や「オロナイン」のホーロー看板も、ノスタルジーをかきたててくれる。

撮影：田口昭充　文：桑畑裕子　協力：トヨタレンタリース石川　扉写真：輪島市皆月地内

飛行機&レンタカーでのんびり周る

40年後の「元カニ族」石川・能登半島周遊旅行

40年前「カニ族」だった「元カニ族」も、そろそろ時間をかけた旅に出られる年代。夜行列車を飛行機に、徒歩をレンタカーに変えて、映画『ゼロの焦点』で見たヤセの断崖へ。

ヤセの断崖

映画『ゼロの焦点』の撮影場所として有名になった断崖絶壁。高さが55mもあり、迫力満点。一度訪れたら、印象に残る風景だ。ここに立ちたくて「能登」を目指して旅した若者も少なくなかった。

千枚田

能登半島をそして日本を代表する棚田の風景。細長い千枚もの田んぼを作った昔の人の苦労が偲ばれるが、海をバックに描き出される棚田の幾何学模様に美しさを感じずにはいられない。

窓岩

岩の真ん中に直径2mほどの穴が窓のように空いている奇岩。曽々木海岸のシンボル的な存在だ。この辺りは日本海の荒波をまともに受けるため、冬には波の花がたくさん見られる場所。

大沢間垣

海岸ぎりぎりの低い場所にある大沢地区と上大沢地区の集落は、日本海から吹きつける強い風から家を守るため、間垣と呼ばれる竹垣で家を囲う伝統的な様式が今も残る。

禄剛埼灯台

能登半島の最先端に建つ白亜の灯台。明治16年にイギリス人技師の設計で建設された。ここに立つと、“最果て”まで来た実感が。ここからは朝日も夕日も眺められる。

廃校（輪風堂）

昔懐かしい2階建の木造校舎。廃校になっていた旧輪島市立滝又小学校の建物は、5年ほど前から、製麺会社の事務所として利用されている。

見附島

見付海岸の沖にある高さ30mほどの奇岩。弘法大師が佐渡から能登へ渡る際に最初に見つけたと伝えられることからこの名がついた。形が似ていることから「軍艦島」とも呼ばれる。

機具岩

能登二見とも呼ばれる夫婦岩。昔、織物を広めようとした男が、山賊に出会ってしまい、驚いて海に織機を投げたところ、それが岩になったという伝説が残る。

巌門

海に突き出た大きな岩礁に、日本海の荒波によってぽっかりと穴が空いた貫通洞門。ここも能登金剛を代表する景勝地の一つ。遊覧船もあり、遊歩道も整備されているので、散策しながら風景を楽しむのもいい。

恋路海岸

嫉妬に狂った男のために、愛し合いながらこの世で結ばれなかった鍋乃と助三郎の悲恋物語が残されている静かな海岸。2人が仲良く座るブロンズ像もありロマンチックな雰囲気も漂う。

恋路駅

かつて若い女性旅行者が必ず訪れ、記念に切符を買い恋の成就を願った旧のと鉄道の駅。H17年に穴水～蛸島間が廃線となり現在は廃駅だが、昔を懐かしみ訪れる人も多い。

昭和40年代、空前の“能登半島ブーム”が起こり、都会の若者が大挙して能登へ押し寄せた。その火付け役となったのは、能登が舞台となった映画『菊田一夫原作の『忘却の花びら』（昭和32年）や松本清張原作の『ゼロの焦点』（昭和36年）など。当時、貧乏旅行をする若者が横長のリュックサックを背負った姿はカニに似ており、狭い所は荷物がぶつからないよう横歩きになったため「カニ族」と呼ばれた。彼らは、映画の舞台となったヤセの断崖を目指して能登を旅した。映画の場面と同じ場所に立ち、モノクロ映画で観た風景を総天然色で見た感動は大きかったにちがいない。40年代後半、国鉄の「ディスカバージャパン」キャンペーンの頃も、若者は能登を巡った。「ディスカバージャパン」は「日本を発見する」自分自身を再発見する」というコンセプト。若者は地元の人とふれあいながら、自分探しの旅を続けた。

昭和40年代の“能登半島ブーム”

“懐かしい日本”を発見に

能登は、昭和40年代の「カニ族」から50年代の「アンノン族」まで、若者の心をとらえ続け、旅行ブームを起こしてきた。東京や大阪から国鉄の夜行列車に揺られてようやくたどり着く憧れの能登半島。徒歩やバス、ある者は自転車で半島を巡る。ユースホステルや民宿には若者があふれ、数え切れないほどの出会いと別れがあった。

しかしその後は若者の関心が海外に向けられるようになり、“能登ブーム”は徐々に下火に。観光開発からは少し取り残された感がある能登半島だが、今になればそれがかえって、“美しい日本”“懐かしい日本”を現代まで残す要因になっている。

若者の心をとらえて放さなかった秘境能登は今どうなっているのか？　昔訪ねた人も、憧れで終わっていた人も、40年後の能登を訪ねる旅はいかがだろうか。“陸の孤島”といわれた能登も、能登空港の開港により東京から約60分とアクセスがよくなった。カニ族だった世代は今、熟年。徒歩や自転車では回れなくても、飛行機とレンタカーを使えば気ままに周遊できる。旅のガイドはカーナビと『ぶらり能登2007ガイドブック』（次ページ参照）があれば大丈夫。

能登空港ターミナルビル1階、能登の旅情報センターなどで手に入れてから車に乗り込もう。

さて、ゆったりした行程でドライブしてもらうために、能登半島の距離感はつかんでおいていただきたい。半島先端の禄剛埼灯台から付け根の和倉温泉までは約100㎞。半島の面積は東京都とほぼ同じ。ただ、道路は混むことがないので、距離の割にはスイスイ走れるだろう。

景色がよく集落が多いのは、半島を縁取る海岸沿い。日程に合わせて半島を一周、半周とコースを選べばいいだろう。海岸線の景色は半島の東西で異なり、七尾から半島先端の禄剛埼灯台までの東側は波の静かな内海で、穏やかな景色が広がる。禄剛埼灯台から輪島を経てヤセの断崖へと続く西側は、波が荒く景色も男性的。特にヤセの断崖や機具岩、巌門にかけての海岸一帯は能登金剛と呼ばれ、激しい波に削り取られた奇岩や断崖が雄大な景観を呈している。

ところで、かつてカニ族やアンノン族の若者が好んで能登を訪れたのは、地元の人の人情にふれて時間をかけて旅すると、より魅力が感じられる土地だからではないだろうか。能登の魅力は観光地だけでなく、何気ない町並や看板、人々とのふれあいの中にあるのかもしれない。

伝統を知り、人と出会う

能登の魅力を伝える「宿」と「食」

伝統の素晴らしさを実感したり、
新たな発見ができる宿と食事処。
人とのふれあいを大切にし、能登の「食」を味わう。

部屋は洋室のみの全8室。窓からは七尾北湾の静かな海が臨める。ダイニングやテラスで寛ぎながら、オーナー夫妻に能登島の魅力を教えてもらうのも楽しい。

能登島のアットホームな宿

島の小さなホテル ウインズ

七尾湾に浮かぶ能登島にあるプチホテル。夕食は獲れたての魚介類をメインにした和食中心の献立、朝食は手づくりのパンやジャム、ヨーグルトでのおもてなしが好評。アットホームな雰囲気に惹かれ、幅広い年齢層のリピーターが全国から訪れる。能登空港の開港により、東京方面からの宿泊客も増えている。

住七尾市能登島曲町8-25-6　電0767-84-1758
料1泊2食12,600円～、1泊朝食付6,300円～

数寄屋造りの建物が水面に映り、夜の佇まいも壮麗。日本海が昼から夜へと刻々と色を変えていくさまを、部屋の窓から眺めていても飽きることがない。

和倉温泉に佇む数寄屋造りの名宿

宝仙閣別館 渡月庵

歴史のある和倉温泉のなかでも、ひときわ趣を感じる数寄屋造りの宿。和倉温泉で最も古い大正4年に建てられた建物は、名工たちが腕を競った時代の芸術品。日本の伝統美を今に伝える落ち着いた空間で、能登の旬の味覚を味わいたいという人におすすめだ。能登の歴史を感じながら温泉に浸かりたい。

住七尾市和倉町タ1　電0767-62-1788
料1泊2食15,750円～

春になると、目の前の海で2艘の船で網を引くサヨリ漁が行われ、春の風物詩となっている。運がよければ、部屋にいながら、窓からその風景を眺められる。

日本の伝統、輪島の伝統に出会える

海游 能登の庄

宿は輪島の中心地から車で10分ほど。玄関を入って靴を脱ぐと、廊下まですべて畳が敷き詰められており、すぐに寛いだ気分に。輪島塗のよさを知ってもらいたいというご主人の心遣いから、食事には高価な輪島塗の食器が惜し気もなく使われている。温泉の泉質は肌がつるつるになるアルカリ単純泉。

住輪島市大野町ねぶた温泉　電0768-22-0213
料1泊2食25,200円～

目の前は九十九湾。オーナーが自ら船を操り、海へ出て釣ってきた魚が食卓に並ぶ。大漁のときは、料金からは考えられないようなごちそうが並ぶかも……。

“あの時代”を思い出す旅の宿

能登漁火ユースホステル

カニ族、アンノン族も泊まった旧『九十九湾ユースホステル』。ご主人は昭和40～50年代の能登半島ブームをよく知る人だ。平成12年に建物の建て替えを行い、名称を変更。最近は、青春時代にユースホステルを利用した世代の熟年夫婦が、ゆっくり連泊していく姿も見られるようになったという。全館禁煙。

住能登町小木ヨ51-6（庄崎）　電0768-74-0150
料1泊2食5,500円～（YH会員4,900円）

今も昔も「食」は魅力

かつての〝能登ブーム〟には、大きな特徴があった。それは圧倒的に女性に人気があったこと。アンノン族の時代ならばわかるが、カニ族全盛の時代から7対3か8対2くらいの割合で女性が多かったという。

その理由ははっきりしないが、少なからず「食」の豊かさが影響しているのではないだろうか。それほど能登の食文化は多彩で食べる楽しみが大きい。

冷蔵・輸送技術が進んだ今でさえ、能登で食べる魚介類の新鮮さ、美味しさには驚くのだから、昔はなおさらだろう。

新鮮さだけでなく、海藻や珍味、調味料などにも、独自の食文化がある。たくさんの種類の海藻が食卓に上り、それぞれに合った調理法で供される。ここ2～3年は、健康志向もあり、海藻しゃぶしゃぶが旅行者に人気のメニューだという。

また、ナマコの卵巣の塩辛「くちこ」や腸の塩辛「このわた」など、能登でしか口にできないような珍味も少なくない。調味料にもイカの内臓などを使う魚醤「いしり（る）」があり、料理も旨く、興味も尽きない。

昔のようにどの家庭でもというわけではないが、季節ごとにこういった珍味や調味料をつくったり漬け物を漬けたりと、能登の人の生活にはいろいろな歳時記がある。せっかく能登を旅するのなら、民宿や食事処でこういった土地の人の食文化にふれるのもいい旅になりそうだ。

旅の宿は、和倉や輪島の料理自慢の温泉に泊まるもよし。昔を思い返し、ユースホステルや国民宿舎に泊まりながら低予算で長期間の旅を試みるもよし。新たな旅のスタイルは、別の楽しみ方を教えてくれるだろう。最近では、若い頃に友達とユースホステルを利用していた奥様が、今度はご主人と一緒にというケースも増えているという。

まだまだ40年前の〝美しい日本〟〝懐かしい日本〟の風景が残る能登。能登半島は、「元カニ族」に再び自由な時間が訪れたとき、時間を贅沢に使ってゆっくり旅してほしい場所だ。

春はサヨリ、ブリ、ヒラメなどが『海鮮丼』の具としても使われる。カウンター9席のほか、小上がり5卓。観光客だけでなく、地元の人もたくさん訪れる。

いちばん人気は『海鮮丼』

まつおか

輪島の市街地にある活魚料理の店。朝8時から開店しているので、朝市帰りに立ち寄る人も。朝市で仕入れたばかりの魚介を7～8種使った『海鮮丼』1,200円が人気メニュー。『上海鮮丼』は1,500円。

住輪島市河井町1-31-1
電0768-22-2790　休10、25日
営8:00～13:30、17:00～20:00

ナマコの卵巣の塩辛「くちこ」も、ほかではなかなか味わえない珍味。隣の『なまこや』で、「このわた」「くちこ」などの珍味を買うことができる。

能登の珍味を味わうなら

なまこや 海ごちそう

能登の珍味を扱う『なまこや』の食事処。ナンバー1メニューは『このわた・いくら丼』1,260円。「このわた」とはナマコの腸の塩辛。「このわたは生臭くて…」と言っていた人でもこれを食べるとクセになるとか。

住七尾市石崎町香島1-22
電0767-62-4568
休木曜　営10:30～21:00

築150年の庄屋屋敷を移築した食事処。茅葺屋根が懐かしい。人気の『海藻しゃぶしゃぶ』は酒粕仕立ての鍋で、色や食感の変化を楽しみながら食べたい。

初めて味わう海草しゃぶしゃぶ

庄屋の館

ぜひここで味わいたいのが海藻料理。特に春は新芽が出て海藻が美味しい季節なのだ。『海藻コース』3,150円～では6～7種類の海藻を、しゃぶしゃぶ、天ぷら、雑炊などいろいろな食べ方で楽しめる。

住珠洲市真浦町カ6-10
電0768-32-0372　休毎月1回不定休
営11:00～20:00頃

料理をしてくれる若奥さんは能登の食文化についても話してくれ、貴重な体験ができる。前日までに予約が必要なので注意。綴れ織り工房を併設している。

古民家で能登の庶民の食文化を

珠洲 織陶苑 典座

珠洲焼窯元の築150年の古民家で能登庶民の豊かな食文化「祭り御膳」を味わえる。器は珠洲焼、古伊万里や古い輪島塗の漆器などが使われる。昼膳は2,000円か4,000円。夜膳2,500円～。

住珠洲市三崎町伏見ワ部23
電0768-88-2657　休無休（前日までに要予約）営11:00～14:30、18:00～21:00